

南アジアの死生観 インタビュー法から

Folk Beliefs on the After-Life in South Asia : a Study through Interviews

中 村 俊 哉

Shunya NAKAMURA

福岡教育大学

(平成15年9月10日受理)

要約

来世をどのようにとらえるかは、死への接し方、現在の心の持ち方などに大きく影響を与えるはずである。これらの心理学的背景を見るために、インドにおいて実施した一般の人々のインタビューの中から、お盆の存在、死者との対話、輪廻、シャーマン(ヒーラー)について取り上げた。インドにおける死後の儀礼で、霊が家族のもとに戻るというファンタジーが存在することが確認でき、お供えも広汎に見られ、毎年のお盆(年に一度死者の霊が戻る行事)については存在することが分かった。しかし、地域とカーストによっても違いがあり、全体に共有されているとはいえなかった。死者への報告、対話はインドでも見られるが、その質に違いがあると考えられる。輪廻についての考えは、世代によって大きく変容が見られる。Folk Beliefを研究する心理学的意義について論じる。

Key words Obon, Sraddh, Navratre, Tarpan, Hindu, Dialogue with Ancestors, Reincarnation, Shamanism

1 はじめに

1 本研究の流れ

筆者らは、南アジア(インド)、東南アジア(インドネシア:バリ島、ジャワ島)における死生観とターミナルケア観に関する研究を、インタビュー法により実施している。本研究は、その中の一つとして、南アジア(インド)における死生観についてあつかう。

日本に見られる死生観の中にも、ヒンドゥー教的な死生観が含まれている。例えば、輪廻の考え方があり。様々な死生観はインドから純粹に伝わったのではなく、中国の思想などを含むものとして伝わっていると考えられている。お盆の考え方について後ほど述べるように、伝達という視点から死生観を捉えようと、どこかの何が伝わったかの経緯は重要なものになる。一方で、それらの死生観が、元々人間に自然に備わっていると考える心理学的立場も存在する。これらについては、まだ不明なことが多い。また、東アジア全体に、シャーマニズム的な考え方が存在していたと考えられ、筆者は、これらは日常的にも存在しているの

ではないかと思うようになった。これは、後に述べる、死者との対話という現象に見られると筆者は考えている。このように死生観を、伝達という歴史的な経緯で説明する考え方と、様々な死生観のFolk Beliefは、人間の自然な心としてすでに存在し、地域によってその強弱があるだけではないかとする考え方もある。前者の伝達で説明するとして、いろいろな考え方が伝達される場合、タマネギの皮をむくように、一皮むくとさらに奥に古いものがある。その意味で、インド的な考え方を東北の果てで受容した日本と、東の果てで受容したバリ島は、歴史的には数々のヒンドゥー的の死生観を受容して千年以上たっているものの、奥の方には原始的な死生観を残しているのではないだろうかということになる。そして、一見しては実態は分からなくなってしまっていると思われる。文献法的な伝達経路をいかに丹念に追っても、受容した側がもともとある古い原始的な死生観と折衷していたのでは、実態は分からない。実態というものは、そこに行って聴いてみて初めて分かるはずである。日本では、仏教を受容したと言っても、実態は祖先崇拝と考えられ、様々な混合体に

注) 本研究は、日本学術振興会科学研究費(課題番号 13571007)の補助を受けた。

なっている。どのような混合があるかという点、例えば、死者の魂がどこに存在するかという問いを、私は多くの人に問い続けた。その答えの分布は、大きく言って2つである。天の方向にあるというものと、家の近く、お墓、大切な人の側など、身近にあるというものと大きく分布するのである。お盆の行事は日本の文化に根付いて千年以上たつと考えられるが、祖先崇拜と、原始神道や沖縄に見られる御嶽（うたき）信仰とは、何らかの心理学的な連続性を想定できよう。ともに、神や霊が人間の近くに降りてきて、相互交流をするという心の持ち方である。お盆が仏教行事として行われている背景は、混合の例として興味深いものがある。伝達という考え方の他に、素朴な人間的・自然的心理状態が存在し、それらが活性化したり抑制されたりしているととらえることが出来る。またこうした混合、使い分けの心理状態すら、人間的・自然として元々あると考えることも可能である。

今後、インタビュー法を継続するとともに、これらを含んだ質問紙を作成し、各地域で調査を行うことにより、死生観の心理学的な解明をしていくことが重要な意味を持つ。この試みを経て、人間的・自然的な一部を強めたり、抑制したりしている現象を明らかに出来るのではないかと考えている。

筆者は、01年、日本滞在中のインドネシア人の留学生にインタビューを開始し、01年に初めてインドネシア（イスラム圏であるジャワ島、ヒンドゥー圏であるバリ島）およびインドを訪問し、インタビュー調査を開始することとなった。これは、心理学的なマイクロエスノグラフィーの試みである。それは、インタビュー法を通して、人々の素朴理論（Lay theory）を記述する試みである。本研究は、その中から、インドに関するものをあつかう。

2 死生観に着目する理由

筆者の関心は、文化によって死生観が大きく異なること、そして類似している点にある。これは、日本の中・地域間でも、世代間でも同じ事がいえよう。都会に生まれ育った人間にとって、地方にのこる数々の行事は新鮮なものである。伝統的な伝達だけでなく、新たな解説、解釈は、個々人に影響を与えるものである。これらが相矛盾することもある。

地方によって、あるいは国によって、伝達されたものは若干異なる。例えば、インドから中国を

経て伝わったはずの考え方は、そもそもインドでは現在どうなのか。お盆などの具体的な行事も、その起源には諸説あるようである。

お盆は、一般に盂蘭盆とされ、サンスクリット語の「ウッランバーナ」の音訳とされるが、これに対して反論もある。日本におけるお盆は、中国では鬼節である。徐華竜（1995）の「中国の鬼」（青土社）によると、それは祖先をまつる祭日であり、中元節、つまり7月15日であるが、元々は7月1日から15日である。これは、正月15日の上元節、10月15日の下元節に対応し、いずれも道教に由来する。彼によると、中元節の起源は、仏教起源説と、道教起源説があるが、徐はさらに祭祖説をあげている。

道教の文献では、中元の日、神仙のいる山で、様々なものを神仙にかかげ、餓鬼と囚人が解放、解脱される日である。道観は加持祈祷をし、庶民は豪華な料理を供えて祖先と神霊をまつた。

仏教では、この日は摩耶夫人の腹に釈迦が投胎（人や動物の死後にその靈魂が他人の体内に入って転生すること）した日とされる。あるいは、目連（釈迦の十大弟子の一人）が母を餓鬼界から救った物語から、その日が説明される。釈玄広によると、盂蘭盆（正しくは烏藍婆掌）は、インド、中央アジアでは、「自恣」（じし）（4月15日から7月15日までの雨期の間、草木や小虫を踏み殺さないよう外出せずに、洞窟や寺院にこもって修行する「安居」が終わった日に、修行僧が互いに自分の犯した罪を告白し許しを請うこと）の日のことであり、供物をたくさん用意して僧侶に施し、死者の「倒懸」の苦しみを救うとされる。

これらに対して、祭祖説では、中国の庶民の風習は仏教、道教以前からそもそも広く流布していたとされる。この日は、「亡霊が冥界から現世に戻ってきて家族に会うといわれており、祖先を迎えるために、どの家でも紙銭とごちそうを用意して祖先をまつる」とする。「一日前に、一家の主が指揮し、姓氏を記した灯籠をつり下げ、香を焚き紙銭を燃やし、戸外から祖先を家の中に迎え入れ、毎日三食食事をお供えてまつる。普通3、5日間であり、長くても十日間、少ないときにはたった一日ということもある」とされる。そして、徐は祭祖説が最も実情に近いとする。

そもそもインド、あるいはヒンドゥー文化圏には、祖先の霊が戻ってくるという考え方は、現在（当時も）ないのか。死生観やBeliefを、そのまま問いかけ、それらの全体像を把握することが必

要ではないか。また、歴史的な変遷だけでなく、そもそも心理学的には死生観をどのように持っているのかを知るべきではないだろうか。死生観は、単に知識として伝達するだけの物とは思えない。すでに述べたように、伝達という現象以前に、人間の自然な心が存在し、地域によってその強弱があるだけではないか。人間的な自然の一部を強めたり、抑制したりしている現象を明らかに出来るのではないか。

さて、日本でも、他の諸国でも、科学的な思考が広まり、都市化したことによる死生観の変化もみられる。また心理学的な意味でのシンクレティズムが広範に見られよう。シンクレティズムの定義としては、「異なった出自をもつ宗教的要素が共存している状態」（荒井）などがある。

筆者は、このシンクレティズム現象の解明に大きな問題意識を持っている。シンクレティズムがなぜ心理学の問題として遡上に上がるかという、場合によっては、個人の中では混乱があると思われるからである。つまり、3つか4つの異なった考えを、すべて取り入れているか、使い分けているか、一つにしようとして苦しんでいるかである。筆者が体験する法事などでは、複数の考え方を混在させてすべてをやっている観がある。例えば死者がいつ天上に昇っていくかのイメージは、死後の直後、火葬をしているとき、49日の法事の時など、それぞれ説明が混在しているのではないか。しかも、輪廻するという考えまで取り入れている。輪廻して人間になっているなら、天上や別世界に行かないのか。こうして心理学的レベルで相容れないものが共存するとき、文化葛藤が起こることもあるし、起こらないこともある。学問的には、死生観の仕組み全体を見渡すような統一したとらえ方がみられない。それゆえに、外国に対して日本人の死生観の説明が明確に出来ない。こうした日本的な混合の特質を知るためにも、諸外国の死生観の全体像を把握することも重要である。

このほか、死別後のうつ状態についての臨床に、筆者には大きな問題意識がある。筆者は、かなり前に、アメリカ人の記載したものを讀んだ経験があるが、それがどこに書いてあったものかは思い出せない。その人によると、アメリカ人の方が、配偶者の死亡によっておちいるうつ状態が激しく、日本人はそれほどではない。その理由は、日本では仏壇に向かって対話しているからであろうという記載であった。この記述が、次第に何度も思い出されるようになった。実際、日本では仏

壇がない家の人でも、死者と空想上の対話をするのだから、文化的にはこれらの心理は強く継続していると思われた。更に、生きている人との心の中での対話もしばしば見られる。そもそも、欧米人に死者との対話がないという指摘が興味深い。それは本当だろうか。そして、10年を経た現在、この領域に本格的に踏み出すことにしたのである。

3 本研究の着目点

本研究で中心に見てゆくのは、このように死者との対話がどれくらい広く見られるかということである。また、お盆の現象がどれくらい分布しているのかということも関心がある。いずれにしても、東アジアにお盆、鬼節など、霊を迎える現象が存在しているのは事実であり、その起源については不明なことが多い。これらはインドに存在するのか。インドネシアに存在するのか。

当初インタビューを始めた頃、死者と対話しないと人々が、とくにキリスト教の日本滞在留学生に見られた。その後、イスラム教の人にインタビューをするようになって、同じ現象が見られることを確認した。本研究では、これら死者との対話、死者の霊を迎えるという現象と、それらを抑制する現象について、実際のインタビューから明確にしてゆく。

つぎに、輪廻転生、天国などの考え方についての文化による考え方を見てゆく。これらの考え方が、どれほど広く存在するのか。普遍的に存在するのか。単に文化的に流入したのか。

そして、取材の中から改めて確認できたのは、霊の存在についての信念であり、ヒーラーの存在である。霊をどのように実態としてとらえているか、その霊とのやりとりをおこなうヒーラーをどのように文化に組み込んでいるか。イスラム教の人においても、霊についての同じような言説がみられるのだろうか。それとも、近代的な考え方が普及しているのだろうか。文化、宗教、地域によって、大きく対応が分かれる部分であろう。これらの信念の背景が興味深い。

したがって、インタビューの分析を行うに当たっては、お盆のテーマ、死者との対話のテーマ、輪廻のテーマ、シャーマン・ヒーラーのテーマについて分けて扱う。インタビュー全体については、科研報告書の巻末に添付する予定である。

4 本研究の方法

筆者らの研究スタイルは、研究的インタビュー

法と質問紙調査の組み合わせを方法をもちいることである。インタビュー法は、ほとんどはインフォーマントの了解のもとテープにとり、なるべくその日のうちにテープ起こしをするというスタイルを取っている。そこでの対話は、積極的インタビュー法を取った。つまり、客観的に問いを発するのは当然であるが、その中に、日本の情報を入れたり、こちらからさらにつっこんだ質問もするという方法である(Riesman 1970)。筆者はリースマンの内省的エスノグラフィーに影響を受けた。インタビュアーの感じることも、重視する立場である。筆者は、インタビューのプロトコルには、必ず問いの部分も記載する、つまり対話として記録する。ややもすると、エスノグラファーは、自分の存在を陰のように扱う。しかし、インタビュアーは明確に存在しているのであるし、問いを発しているのであり、インタビュー自体は相互作用なのである。そういうメタ理論の上に立ったインタビューであることを強調しておきたい。

テープ起こしは数日のうちに終わらせないと、テープがたまってくる上に、聞き取りにくい部分の記憶がなくなること、筆者は早くから気づいていた。本研究では、インタビューはほとんどは数日中に文字化することにつとめた。

ところで、筆者らは文化人類学者がフィールドに入り、さまざまな研究を発表していることに、大変な敬意をもつものである。文化人類学者の研究は、我々心理学に所属するものにとっても、大変有意義である。例えば、安野早己(2000)は、西ネパールのポピュラーヒンドゥーイズムにおける憑依について扱っている。そこでは、マストと呼ばれる神々が信仰され、ダミという霊媒に憑依し託宣を与えるという。紛争の解決や、不幸からの癒しを、神にすがっているという現象がある。外川昌彦(2003)は、インドベンガル地方のヒンドゥー女神と村落の民族誌を出している。金基淑(2000)は、ムスリムでありながらヒンドゥー的であるポトウアカーストの民族誌を通して宗教文化の重層性を示した。

文化人類学者のエスノグラフィーと、筆者ら心理学者のマикроエスノグラフィー(箕浦)の違いは、彼らが長期的にフィールドに入るのに対して、筆者らの方が短期的であることである。しかし、対話の中で、なるべく自然な会話に努めた。

さらに我々の調査の特徴は、インタビューとともに、ある程度大きい集団(それぞれ100以上を目指した)に対して質問紙調査をおこなうことで

ある。質問紙調査でインタビュー法を補完しようと考えているのである。この点は、質問紙を重視しない箕浦の考えとも異なると思う。質問紙調査は、各国の比較にも役立つ上、インタビュー数の少なさを補ってくれる。逆に、質問紙調査だけでは不十分なところを、インタビュー法は補ってくれる。ポイントは、インタビューをなるべく先に行うことである。このことによって、質問紙項目がイーミックなものに近づくと考えられる。本研究は、質問紙を作成するために全体像を把握するという意味でも重要である(中村、倉元、中島、印刷中)。

筆者らは、文化人類学における成果と、我々の研究とは、相互補完するものと理解している。従って、本論でも、なるべく文化人類学的民族誌を引用していきたい。

なお、インタビュー中の()は、筆者の問いである。

特別な用語は、聞き取ったとおりにカタカナで表わしたが、その文字を聴いた場合は付記した。〈 〉は、筆者のあとからのコメント、解説である。インタビューの段落の前後には、インタビュー番号(インドを表すIの後に、インフォーマント番号をつけたもの)と段落番号を付した。段落の終わりにも番号を付したのは、「中略」が入った場合にどこまでがその段落なのか混乱するためである。

II インドの死生観

インタビューの経過

筆者は、2001年8月に、インドネシアのジャカルタを発って、タミルナード州のチェンナイ(マドラス)からインドに入った。そこで見た人々の姿は今でも鮮明である。とても紳士的な人々と感じた。インタビューは、日本語をある程度はなせる人を紹介してもらって行なった。早速チェンナイのインド人から、「火葬をした灰を海にまくのは時々で、多くの人は庭に埋める(日本のように石などは置かないこともある)」という驚くべき発言を聞いた。また、「州によって宗派や考え方が違い、インド人ですら全体像をつかめない」ということを聞いて、この研究の意義を再認識した。

以下、すべてのインタビューは、時間順に並べることとした。

事例対応表**お盆のテーマ**

- 事例1 インド人 男性 40代 出身、チェンナイ 日本語 日本留学歴なし。
- 事例2 インド人 女性 30代 ムンバイ 日本語、英語混合 日本留学歴なし。
- 事例3 インド人 男性 30代 コルカタ 日本語 日本留学歴あり。
- 事例5 インド人 男性 30代 ニューデリー 日本語 日本留学歴あり。
- 事例6 インド人 男性 40代 コルカタ 日本語 日本留学歴あり（事例3の1年後）。
- 事例7 インド人 男性 40代 コルカタ ベンガル語（通訳つき）
- 事例8 インド人 8人とのディスカッションにて 女性E 20代 シャンティニケタン 英語（通訳つき）
- 事例11 インド人 男性 40代 コルカタ 日本語 日本就職歴あり。

死者との対話のテーマ

- 事例5 インド人 男性 30代 ニューデリー 日本語
- 事例7 インド人 男性 40代 コルカタ ベンガル語（通訳つき）
- 事例9 インド人 男性 20代 シャンティニケタン 日本語 留学歴なし
- 事例10 インド人 男性 20代 シャンティニケタン ベンガル語
- 事例11 インド人 男性 40代 コルカタ 日本語

輪廻のテーマ

- 事例3 インド人 男性 30代 コルカタ 日本語
- 事例5 インド人 男性 30代 ニューデリー 日本語
- 事例6 インド人 男性 40代 コルカタ 日本語
- 事例7 インド人 男性 40代 コルカタ ベンガル語（通訳つき）
- 事例8 インド人 8人とのディスカッションにて 女性E 20代 シャンティニケタン 英語
- 事例11 インド人 男性 40代 コルカタ 日本語

ヒーラーのテーマ

事例5 インド人 男性 30代 ニューデリー 日本語

事例11 インド人 男性 40代 コルカタ 日本語

1) お盆のテーマ

- 事例1 インド人 男性 40代 チェンナイ (I1-6) (祖先の魂が、毎年一回来て、戻ることありますか) はい、毎年。(それは何という名前ですか) 名前はわからない。(何月ですか) いつも夏。5月から6月の間にします。(家族は集まりますか) はい。亡くなりました日にもお祈りします。あるいは誕生日の日に。両方とも大丈夫です。(I1-6)
- (I1-7) (何日間家にいますか) 家にも、お寺にも。ほとんど家にいます。
- (何日間。2日、3日?) 一日だけ。(死んだ人はどこにいますか) 天に。解脱をもらって、天に行きます。(I1-7)

- 事例2 インド人 女性 30代 ムンバイ (I2-1) (祖先が帰ってきますか) はい、帰ってきます。そのために祈る。シュラッドという。お米と水で作った甘いものをカラスにあげます。階級がインドにあります、ブラフマンの人に、食事のためにインビテーションをあげます。ブラフマンは祖先です。2-3時間家にとまり、祖先の気持ちがあります。お盆の祭りの時、家に来ます。アンセスターの感じがあります。(I2-1)
- (I2-2) (魂を呼んで、一週間ぐらいですか) 2週間。明日から。<ちなみに、インタビューは9/1で、明日は満月と思われる> (I2-2)
- (I2-3) (呼ぶときは、火をつけますか) 食べ物を供えます。カラスは、祖先の感じです。
- <日本では、迎え火で魂を呼び、送り火で魂を送ると説明する>(I2-3)

- 事例3 インド人 男性 30代 コルカタ (I3-1) (何か、今はお祭りなんですか。ある人からシュラッドというのがあると) シュラッド? スラッドというのは、日本で言うと、ある人が亡くなったあと、葬式終わったあと、11日間後に、ここでその亡くなった人の魂を満足させるために、招待するんです、親戚とか友達とか、火葬場につれてった人たち。それをスラッドと言います。こちらではサッドルといいます。(一年に一回の、お盆みたいな意味ではないですか) いや、それもありますけど。それはドルーガ女神

の祭りの、1週間前、モハンラヤ、という祭りが
あります。そういうときは、亡くなった人のため
に川に行ってから、あの一、お参りするんです。
それは日本で言うと、お墓参り。(それは今では
ないんですか) 今じゃないです。それは17日。
今月の17日。(ふーん)

(スラッドは、葬式のあとの儀式で) 日本で言う
と、49日ありますよね。それは、葬式終わった
あと49日で招待しますよね。親戚とか友達に。
同じような意味です。こちらではスラッドとい
います。そういうときは、子どもたち、息子さんは
頭を坊主にするんです。川の所へ行って。火葬し
たあと、11日間までは、作った料理はいただか
ないです。ですから、自分で料理をつくって、川
のところで。作ってから食べて。それは昼間。夕
方は、家に帰って、くだものとかミルクとかは食
べるんです。11日間ずうっと続ける。そして11
日目の日に、お坊さんと呼んで、儀式が行われま
す。お坊さんと呼んだ次の日に、親戚とか友達
に、呼んで、魂を満足させるために、招待する。
それをスラッドといいます。(I3-1)

(I3-2) (9月17日から・・・) それは、年に1回あ
ります。それはお盆祭りのようなものです。(そ
れはなんと言うんですか) これはね、モハラヤタル
ボンといいます。タルボンはお盆と一緒に意味
ですね。そういうときは、息子さんたちはね、川
の方に行って、亡くなったお父さんとか、亡くな
った親戚とか、そういう、拜むんですよ。インド
はお墓はないんですよ。すべての灰は、川にまわ
せるんです。ですから、川が墓みたいな意味で、
川に行って、お坊さんと呼んでから、お祝いをする
んです。それが、インドのお盆みたいなもので
す。それは、今年は9月17日にあります。(I3-2)

(I3-3) (タルボンの時は、祖先の魂は戻ってくる
んですか) うーん、もどってくるということもある
可能性はありますけどね。ただ、私のお父さん
とか、お父さんのお父さんとか、まだお父さん
のお父さんとか、みんなをお参りするんです。名前
をいいながら。ですから、年に1回だけは、その
魂を満足させるためにおいのりする。(じゃあ、
食べ物とか) 食べ物とか、供えます。それは、川
に流せるとか、またはお坊主さんにあげる。(9
月17日の1日だけですか) 1日だけです。それみ
んな。川の方へいってお参りする。けれど、暇の
ある人たちは、1ヶ月前から川に行って、お参り
するんです。そして、17日の日が、最後の日で
す。時間がいない人たちは、最後の日でお参り。で
すから、川の隣に住んでいる人たちは、やっぱり

1ヶ月ほど毎日お参りします。でもね、今は皆忙
しくなってるから、1ヶ月ずっとお参りする人
が、だんだん少なくなってきている。1日だけ。
(I3-3)

(中略) (I3-9) 11日間川辺で自炊する。今日はも
う終わっている。昼頃する。(ムンバイの人が、
カラスが先祖のように感じると言っていたが) う
ーん、11日間長男が自炊したとき、まずお米な
どを自分で食べずに、戻ってくる魂にあげる。そ
れをだいたいカラスが食べたりするので、魂がそ
の姿で戻ってきているなどと思う。あるいは水に流
されたりする。もどってくる魂のために、ひとつ
まみ置くわけですね。魂も食べるけどカラスも食
べると。

(I3-10) (お盆に相当するタルボンの時も) 供え
たお米とかを食べるということですね、祖先が。
家の中にお供えをする。このときは、本人の好物
をお供えする。お米とかはお坊さんに食べてもら
う。料理は家の中で食べるんですがね、亡くな
った者が好きなものはあげる。

(I3-11) お坊さん、金持ちじゃない。サラリーマ
ンやっている。

事例5 インド人 男性 30代 ニューデリー

(I5-9) (ある人が死んで、その人の写真を家の中
に飾って、日本でしたら、お線香を上げたり、
写真の前で手を合わせたり、食べ物をおいたりす
るんですが、そういうことは) 例えば、手を合わ
せて一礼ぐらいはあると思うが、花そえたり、食
べ物あげたりはいつものことではない。年に1回
お盆というかんじですね。その時は、線香とか、
なんか食べ物を供えることはある。それもそれぞ
れによります。義務ではない。写真は、あったり
無かったりする場合があるから。(I5-9)

(I5-10) (年一回のお盆というのはどういうも
の。いつやるんですか) 9月頃ですね。9日間。
ナヴラトレといいます。Navratre. Navという
のは9日の意味ですね、Ratreというのは夜。そ
の時は、自分の死んだ人たちを思い出して、川や
池の方に行って、例えば花を川に流したり。墓が
ないですね。だいたいいないですね。池だったら、
池の方に、土を上の方に上げて、そちらの方に食
べ物あげたり、花をおいたり、線香はあったり無
かったりするんですけどね。感謝の気持ちを言
いますね。9日間の間は、1日間ぐらいは自分のつ
ごうで皆、いいご飯をつくって、死んだ親戚を思
い出す。だから、ご飯を食べる前に、たぶんい
ないとおもうけども、夕飯をその死んだ人に上げ

て、その分を上げて。皆、ご飯。

お母さんやお父さんが、するんですね。川の方に、名前と死んだ人を思い出して、花を上げたり、ご飯をあげたり、線香をつけたり、しますね。それから、帰ってからみんなでご飯を食べる。(I5-10)

(I5-11) (去年、何人かにちょっと聴いてみたところ、確かに9月の初めにお盆があるという人が何人かいたんですね。この人は、シュラッドとっていました。そういうことはありますか) 方言ですね。ナヴラテレがヒンディー語と思います。それ月によって変わりますね。ルナカレンダー、月のカレンダーあるでしょ。(満月のときですか) いや、満月じゃないけど、月が減っていききますよね。減ってからまた上がってきますよね。上がってから9日間。私も微妙。上がっているほうと思います。黒いところから始まるからね。だから上がりの方と思います。(I5-11)

(I5-12) (別の人は、ドルーガ祭の一週間前、9月17日にやるっていったんです) ナウラトラの最後の日に祭をやったりするから。その一週間前と同じ感覚ですね、大体9日。あと人にもよる。その人がどれくらいしているか。ナウラトレのことね。(この人が、モハラヤタルボンで言っているんですが、きいたことはありますか。) 人の名前? (シュラッドと同じ意味と思いますが) この言葉が知らない。別の地域の言葉。(これ、カルカッタの人が) だからこれ同じ事かも知れないけど、言葉が違う。(I5-12)

(中略) (I5-14) (日本のお盆は7月15日で) 8月(ええ、大体3日間ぐらい戻ると言われているんですが、死んだ人の魂は戻りますか) 戻っているか、そこまではヒンドゥーでもいろいろ考えが違いますが。うちは戻らないかもしれないけれども。天国に行ったら、もう戻らないということですね。例えば若いうちに死んでしまった、交通事故などで、人生の行くこと、70才までいかなくて、早めに死んでしまったとしたら、天国にはまだ行っていないけど、その魂がこの世界にいるかもしれないよ、という風に思う人もいますね。それは幽霊になったりすることもあるんですね。天国にいった人は、戻ってこないけれども、その思い出が戻ってくるということ。・・・ある人は、戻ってくると思う人もいます。(I5-14)

(I5-15) (・・・戻ってくると言う人は、9日間戻っていると考えるんですか。それとも9日の何日かだけで) まあ、もちろん9日間ですね。1年

のあいだの9日間という感じですね。(その一、そう考える人は、家の中にそういう場所がありますか) ないです。家の中は場所はない。

さっき、言い忘れましたけど、例えば9日、戻ってきますね。戻ってきますけど、何日目に、どんな日にちにいいご飯を作って、ご飯を上げたりすることは、一番近い人、最近死んだ人の日にちに、ご飯を作る。例えば6年前の水曜日に誰か死んだなら、水曜にできれば。(ふーん)

というか、前のはどんどん忘れていく。どこも、記録がないこともあるし。記録あるはあるんだけど。(I5-15)

(中略) (I5-33) (それですね、さきほどお盆、Navratreのときに、魂が戻ってくると考える人もいます。そういう人の考えをちょっと。教えて欲しいんですけども。その人たちは、その魂が、今他の人になっていると考えて、しかも戻ってくると考えるんですかね。) 今こうなっているのとは関係なく、昔としては、私たちと一緒にだったことを、考えて、その魂が我々の所に戻ってきます。現在は動物になっているか、分かりませんが。我々が見た形で、我々が知っている魂で、そういうような感じで戻ってきます。それはもちろん、形に見えないかもしれませんが。(I5-33)

(I5-34) (実際今どうなっているかとかですね、そういうことを分る人はいるんですか、死んだ魂が今どうなっているかを、特別に祈って分かる人は居るんですか) それは、人がどう信じるかによりますけど。私たちの考えは、誰も知らない。神様しか知らないから。こういう風に言うんだったら、それはうそです。坊さんとか、言うんだけれども、それはうそです。分からないからホントは。(I5-34) (中略)

(I5-53) (もう一ついいですか、インドでは家族と一緒に住むことが多いですね。弟の家族、妹の家族) それは田舎。町は全然違う。町はシングルファミリーですね。(じゃあ、ずいぶん変わってきたわけですね) 田舎でもね、同じ田舎に住んでいるけど、結婚したら独立して、別に家たてて、別に住むことがあります。それはかなり変わってきた。(I5-53)

(I5-54) (やはり、死んだひとへの祈り方も変わってきたわけですね) 独立して別に住んでいても、親とか、お祖父ちゃんお祖母ちゃんへの気持ちは同じですね。(お盆の集まりは変わらない?) いや、集まらないかも知れない。集まるといって、集まったりあまりしないと思います。集

まるのは祭のときだけです。その場所にいるときは、その人を思い出す。日本だと墓がこっちにあるとこっちに集まる、という感じですね。墓がないから。私はニューデリー行っても、ボンベイに行っている、ナウラテレのその時は、自分の親戚を思い出す。(集まらなくても、日本からでも思い出すと)あまり集まらない。特別に集まりません。たまたま一緒にいれば、皆でご飯でもたべようかという感じになったりするけど。あまりない。(I5-54)

事例6 インド人 男性 40代 コルカタ

(I6-18) (それで、さっきタルボンTarpanと言いましたが、ヒンディー語でナウラトラというのはタルボンのことですか) ナウラトラは、私は知らないけど。一回聴いてから私はその答えをします。ちょっと私は詳しくない。(I6-18)

(I6-20) (また戻って、Aさんのお家ではタルボンはされているんですか) 毎年やっていますよ。ですから、そういうときはねお兄さんも帰ってくるし。年に一回だけ、やっています。(お兄さん) お兄さんも帰ってくるんです。お兄さんは家にはいないですけど、デリーのほうで仕事をやってますけどね。何が用事があっても、一応帰ってくる。(それで、タルボンの時に家の中に祖先の魂がくるんですか?) あー、ちがいます。これが実際はタルボンはね、1ヶ月前から始まるんですよ。ドルーガ女神の祭りの前で、1週間前からたぶん行われます。その1ヶ月の前から実際はタルボンがある。暇な人たちは、毎日川のところへ行っ、お父のことを思い出すんですよ。水を飲ませ、沐浴してから水を飲ませる。あげます。ご家族のみんなで、亡くなった人や、水をあげるんですよ。

だけど、最後の日ですけど、お祭りみたいな日ですけど、その日で、ずっとやってない人たちは、最後の日でやるんです。例えば私は。私はずっとやってないですけど。最後の日、年に一回タルボンの日が決まっていますけど、その日で、我々は男のひと、息子さんたちがやっています。

(それは家の中ですか、川ですか) 川。川が、まあ家の中もありますが、神様のところですね。家に神棚があります。そういうところで。または、我々はお坊さんの家でやっています。お坊さんの家に行ってからやっています。実際はね、川のところでやるのが一番いいですけどね。その日は川がいっぱいですからね、すぐく込んでいるから。お坊さんの家か、自分の家でやる。そのときは、

お米とか、お坊さんのために服とかかかってあげるんです。まあ、200円もあればもう。(I6-20)

(I6-21) (坊さんはどういう人ですか) やっぱバラモンの人。カーストで一番偉い人。(普段からお寺に居る人ですか?) いや、みんな、バラモンはお寺にいる人じゃないです。ですから各家に回って祈りしています。この辺ではね、日本とはちょっと違います。インドのバラモンのお坊さんは皆お寺を持っていないです。各家に回って、祈りしています。(バラモンの人は何か、分かるんですか、外からみて) それはちょっと難しいですけどね。バラモンの人たちはね、こういうところ、左肩から糸を巻いているんですよ。仕事しているときは隠しているんですよ。名字から分かります。(シャルマとかでしたっけ) そうそう。

(あとどんな) バタツァリアBhattacharyaとかサルマSharmaなど。(I6-21)

(I6-23) (自分の息子たちにも、もし自分が死んだあとタルボンをやって欲しいですか) 私は、私のお父のためにタルボンをやっているんです。私が亡くなったら、私の息子がそれをやるんです。自分の食べ物とは自分でやらない。(それはもう当然) 当たり前。(ふーん、やらなかったら怒りますか) 分からない。私はそういうときは上。<笑い>(I6-23)

事例7 インド人 男性 40代 コルカタ ベンガル語

(I7-8) (お父さんがどうなっているかは占いでわかるのか) これがわからない。でも、どこにいるかわからないけど、たまたま夢を見ている。父と仕事を畑でやっている夢を見ます。私の前にいるとか。(I7-8)

(I7-9) (神に魂が天国に行くように祈ることはいいですか) (頷く) 我々は魂が、平和、満足するために祈りをしています。ですから、年に一回は儀式をする。今日<インタビューは1/6>亡くなったら、1月6日にもう一回儀式を行う。そういうときも、お坊さん呼び食べさせるけど、父が平和になるため、祈ります。バツリサードロー(年、死者儀式 Batsarik Sradho) (I7-9)

(I7-10) (家の中に父をまつ場所がありますか、供えるか) 私の家では、墓を作っている。田舎の池の近くで墓を作っている。そこで毎日洗って、線香をあげている。それ以外、部屋の中にも写真があり、線香とか水をあげている。(I7-10)

(I7-11) (仏教の影響を受けているか) 仏教だけでなく、ヒンドゥー教でもそういう人はいる。思

い出のために、一つの記念のものを持ってきて、半分流し、半分持ってきて墓みたいにして思い出す。(おへその骨が入っているか)へそのところ(ナビ)でなく、残ったもの、骨か何か、そこから取って持って帰る。(I7-11)

事例8 インド人 8人とのディスカッションにて 女性E 20代 シャンティニケタン 英語 (I8-4) (日本でもそうなのですが、お盆はあるか タルボン、ナブラトレを知っているか) (黒板に書く) <通訳氏、ベンガル語と英語で説明、タルボン>

E: 本当に魂が帰ってくるかは分からないが、人が亡くなるのは悲しいことです。我々は、そういうことをやっています。一年はやります。(なんと云いますか、タルボン?) ワンイヤーセレブレーションという。(I8-4) (中略) (I8-5) <女性教授の発言> モハラヤフェスティバルの日にタルボンが行われる。 <通訳氏コメント> 10月ぐらい。

E: ちがう、亡くなったあと、魂が消えてしまう。魂が家に戻るのではない。家も認識しない。母、父も妻も認識しない。我々の家族、システムでは信じられてない。家に帰ってくるとかはいいさないです。

<他の男子学生B> ない。

<通訳氏、天国か地獄から降りてくる、食事をだす。インドでは、我々はタルボンと言うんです。もし、あなたの意見があったら> (I8-5) (中略) (I9-1) <男子学生F> タルボンは、思い出して、亡くなった方を。その方を・・・祭りはするが、ですが、魂は降りてくるかは分からない。そんなことはありませんと思いますね。(I9-1)

(I8-6) (食事を家の中で出したり、川に置く人はどれくらい?) <Fが手を挙げる> (信じなくても、家や川におく人は、どれくらいいますか。訳してください)

E: 川か家ですか 川沿いにおいたことはある。(家族が?) 祀る時期じゃなくて、自分のみが宴会でいっているときですね。最初は食事は自分たちで食べないで、最初は魂のためにおいてから、自分が食べる、そういう話があります。ピクニックかと思ったら、葉の上に置いた。祭りの時期ではなく、最初魂のためにおいてから、食べた。(I8-6)

(I8-7) (あなたはどこですか、出身は。通訳氏聴く、ネパール?) 西ベンガル州の山のほう、ラバー (I8-7)

(I9-2) (他に食べ物や川に置いたことがある人)

F: はい (あなたが? 家族が?) 家族が、(9月ですか) 9月でなく、なくなった日。(2年後、3年後もやりますか) やります。 <通訳氏: バツリサッドです>

(そのほか、食べ物を家や川に置いた人はいますか。二人だけですか) <通訳氏: 父母がなくなっていないから> (I9-2)

(I10-1) (自分が死んだ後、魂が輪廻すると思う人はどれくらいいますか? 手を挙げて) (reincarnationと黒板に書く。) (英語で訳) <男子学生I> 信じない。(I10-1)

(I9-3) 男子学生F: 信じていない。男子学生I: 若者たちはこんなことあまり信じていないです。(ほー。どうなると思いますか) 亡くなった後、何もなくなる。それだけ。何もなくなる。外国のインドのイメージとはちょっと違いますね。でも、若者たちは、ほとんど違います。

(I8-8) (答えたくなかったら答えなくていい。心の中で。ええと。皆さんの家族の中で、おじいさんやおばあさんや、前の人たちが亡くなっているでしょ。その人たちに祈ることはありますか)

H: はい、いろいろあります。(どういう風に祈りますか) <ききとれず>のあとで、デワリという祭りが行われます。そのとき、ベンガル人は、フェスティバルを行います。(亡くなった人を思い出すんですか) ドルーガ祭りの後、カーリー女神の祭りのあと。デワリが行われ、亡くなった人を思い出します。油ランプをつけて思い出したり。

(中略) (I8-8)

(I8-9) (デワリの祭りのとき昔亡くなった家族思い出すひと、他の人は。手を挙げて) A, B <通訳氏、説明>

A: モハラヤタルボンで思い出することはやっています。

B: 毎年亡くなった日に思い出します。そういうときはお坊さんと呼んで親戚を呼ぶ。

(ということは、3つぐらいに分かれるんですね。亡くなった日か、タルボンか、デワリの祭り) (日本では、大体8月、日本人は魂が上の方に行くと思っている。日本でもあまり若い人は信じていない。英語で訳) (I8-9)

事例11 インド人 男性 40代 コルカタ 日本語

(I11-16) (日本だと、年1回、1回とか2回、お盆とかですね、魂が戻ってくるというんですが) ないですね。(戻ることはないですか) ないです

ね。(I11-16)

(I11-17) (何かですね, 何人かにインタビューしたんですけど) だから場所によってちょっと違う。(9月のはじめにもどると) だから, 自分は聞いたこと無いですよ。(聞いたこと無い) ちょっとお坊さんみたいな感じの人たちが, 年に一度, お祈りするんですけど。ちょっと特別に。普通のよりちょっと大きめにお祈りしますけど。でも, 戻ってくると聞いたこと無い。日本に来て, ああこういうこともあるかなと思った時があります。(I11-17)

(I11-18) (ああそうですか) はい。これ, 9月の人はどこの人? (たしか, デリーの方の人だと。ナブラトレというんです) (なんか, 九日の夜という意味らしいです。聞いたこと無いですか) ナブラトリはね, ナブラトレは祭りがあるんですよ。こういう事があるというのは, ちょっと分からないんですけど。祭りはあると思うんですよ。自分はあまり。広いから, いろんな生活の人いるから。ナブラトレといっても, どの地方のとか分からないと, 私にも答えられないですね。自分は, カルカッタ, ベンガル地方だから, そこのあり方は分かるんですけど。見てきただから。(I11-18) (I11-19) (特に, 毎年何かやると言うことはない) ないですね。だから, お坊さんたちはある。毎年。(お坊さんはやる) やります。お坊さんたちの, カスト教のランクがある。カストのランクがあるじゃないですか。ヒンズー教とかいろいろ, 宗教の順で。お坊さんたちの誰か, 亡くなった場合は, 年に1度, 特別なお祈りがある。毎日しても。年に一回は特別にするんですよ。一般の人はしない。(I11-19)

2) 死者との対話のテーマ

事例5 インド人 男性 30代 ニューデリー

(I5-39) (それで, 日本では, 死んだ人を仏壇, 家の中に仏壇という物を置いて, そこで奥さんが毎日お祈りするんですね。そして, 死んだ夫に話しかけたりするんですよ。話しかけたりしますか, インドでは) ない。同じように, 例えば今, 神さまのメッセンジャーと言ったんですね, ラーマとかドゥルガーとかね。そのような絵がうちにあったりするんですね。その絵と, 話しかけながら, 自分の夫のこと, 絵にたいしてですね, 戻ってくるようにとか, 何も問題ないようで, 天国にいるようにとか, 自分が話しかけたりするんです。自分の悲しい気持ちを。旦那にたいして自分の悲しい気持ちをその絵に表わして表現するん

ですね。

(I5-40) (ラーマとか, ドゥルガーの絵に話しかけると) 信じる絵にですね。(じゃあ, 夫に直接話しかけることはしない) 夫に直接話しかけることはしない。あるけど, イメージですね。それはいつでもできるから。(I5-40)

(I5-41) (イメージの中で夫に話しかけることはいつでも出来ると) そうですね。(ただ, 絵とか写真は, 話しかけるのは神様のメッセンジャーとして)

声がつながりやすい。天上ですね。神様のメッセンジャーだから, 私の声が, 神まで届きやすいために。間に入れるんですね。(I5-41)

(I5-42) (じゃあ, 例えば奥さんが死んだ夫に自分の子どもが大学に受かりましたよとか, 報告することがありますけれど, イメージの中で。それはいつでも出来ますか) それはいつでも出来ます。

(それは仏壇の前とか, 何かの前でするのではなくて, 心の中だけでするんですか) 心の中だけだったりするけど, たまにお寺に行って, そういうこと言ったりする。それはお参りみたいな感じですね。(ん?) お参りみたい。(お参り) うれしいことありましたって, お寺に came したと, その声が, 死んだ夫に届いて欲しい。直接はいつでも言えます。(I5-42)

事例7 インド人 男性 40代 コルカタ

(I7-5) (死んだ人を思い出すため, 年1回何かしますか) <タルボン, フランチュドなどのベンガル語で通訳氏と話している> 思い出すために話をするため, プランシェ<planchete>をやっている。部屋を暗くし, 名を呼び, 家族で動き出す。

(何が) 一つのを置いて, それが遊びになる。一人か二人, 死者を呼びながら, 魂が入ってくる。それが入っているか聞く。イエスのところ, ノーのところに動く。この生活はいいか, イエス, ノー。魂を呼びます。お盆はこちらでタルボンをやっている。ドルーガ祭りの1週間前。(I7-5)

事例9 インド人 男性 20代 シャンティニケタン 日本語

(I9-4) (確か, 輪廻を信じず, でも亡くなった日に食べ物を置くんでしたね)

家族の習慣です。(亡くなった日に食べ物を置くと。それは家族の習慣だと) 別に, 自分自身で

そんなことは信じていないです。私の考えでは、
（じゃあ、あなたは、自分ではないかもしれない。もう）私は、父と二人で住んでいますから。わたしの母は去年の1月になくなった。ですから、母の、いろいろ習慣とかありますね、そういうことしました。こんなこととか信じていないけど、家族の習慣があるからしなきゃいけない。
(I9-4)

(I9-5) (1年前のことですか)そうです。(11日間、死んだ後何か)いろいろしました。(どういうことを) プジャとかしたり、頭を坊主にしたり。(何日目になりましたか)10日目です。(I9-5)

(I9-6) (プージャ)マントラ、祈りです。まずいい人に服とかを、布をくあげた。<(灰は川に?)> ガンジス川に。(1年後になにかする予定ですか) また川の近くの寺に行って、母を思い出したり、祈りをする。貧しい人に服とかをあげる。食べ物、米を。(家の中に場は)ないけれど、顔の写真がある。その前で、信じていないが、母が亡く、話せないが、毎朝笑顔の前に祈りをする。信じていないが。

なぜなら、子供の頃から、考える力とっています。メンタルパワーとっている。(I9-6)

(I9-7) (報告)しません。(魂は消えると思うんですね) もっと強くしてください、ということだけ頼む。(神を信じていないんでしたね) ないです。(強くなれたとおもったら、感謝しますか) はい。(神に?) そうではない。理由は、子供の時から母に教えをもらい、If you think you are strong you are strongという考えだった。
(I9-7)

(I9-8) (カーリー寺院には) いかない。行っても、建築を見に行く。(信じない人は多いか) 多い。でも、お化けを信じる人はいる。神を信じなくても。

逆に、お化けはいないが、神がいるという人がいる。祈りとか、していないが、神のイメージがあるんです。そう考える人、多いです。皆信じていないが、寺も行かないが、何か困ったことがあったら、助けてくださいという。(日本もそうです) (I9-8)

事例10 インド人 男性 20代 シャンティニケタン ベンガル語

<この人は、ヒンドゥー宗派のなかで、ブッシュナムという派に属している。その人たちの考えでは、亡くなった人を焼かず、そのまま土をもって入れる。家のそばに立てる。座ったまま入れる>

(I10-10) (手を合わせますか) はい。毎日家族の一人一人が祈りをします。(神は) 同じところではありません。家の中にあります。(I10-10)

(I10-11) (父は、墓の前で、息子が生まれましたよといった報告をするか) おかげさまでと報告する。

(父は、神にも息子が生まれましたと報告するか) 神様にも言っています。神様に信じることあるけど、報告します。(I10-11)

(I10-12) (どういう神) カーリー、ドゥルガー、ビシュヌ、シヴァ。(像と写真) 像と写真。(リンガーは) ない。(苦しいとき、祈るのはどの神か) そのときに、カーリー神にお祈りします。
(I10-12)

(I10-13) (いろいろな神は一つと思うか) 基礎は一つと思います。(その一つに祈ることは) 祈ることもあります。(どういう神様) お名前はなと思います。だけど、信じいています。

<通訳氏コメント：問題あったら、神様助けて、どの神様かは関係なく。パグバー助けてという>
(I10-13)

(I10-14) (死んだ後、魂はどうなる) ちょっと。<困った様子> 難しい。(神のそばに行くか、一体になるか) 行ったりすることはない。それは、信じることであるだけ。

(くつつくと思える人がいるが、どうか) ないとおもう。そんなに。(I10-14)

事例11 インド人 男性 40代 コルカタ 日本語

(I11-11) お祈りする木があるんですよ。(中略)
(庭に木) ちっちゃいけど、それをそこに、墓の上に置いて、毎晩、やはり毎日夕方、お祈りするんですよ。家族の人たち。貝の、こんな白い、大きいのがあるんですけど。(大きい貝) 吹いて、そして、お祈りするんですよ。(ホラ貝ですか) そうですね。(プーッと、ああそうですか)
(I11-11)

(I11-12) (そのときに、お水とか食べ物は供えますか) 食べ物は出さない。インドでは、人が亡くなったら食べ物は出さない。日本では出しますけど、インドでは出さないですね。お祈りの時だけ、果物とか、ちょっと、米とか、そういうの出しても、米はおばさん<お坊さん>はもって帰るんですけど、果物はみんなでお祈り終わったら、神様の、何というかな、まあお祈り終わってから、みなちょこっと食べたりします。(I11-12)

(I11-13) (それで、あの、家の中には何かお祈り

する場所がありますか、死んだ人の)死んだ人の一般的にはないですね。(死んだ人のはない)ないです(神様)だから神様のは、もちろん家の中でもあるけど。だから家の庭に、お墓作る人の墓には、お祈りだけです。家の中には特別ないですね。家の中にも、もちろん写真とか、こういう風に貼ってあるかな。亡くなった人の。(ああ、亡くなった人の。んー)(I11-13)

(I11-14) (次に、死んだ人の魂が戻ってくるというようなときはありますか)それは、インドの場合は、きれいに、なくなったときに、やりたいこと、やりたいことがですね、亡くなった人が死ぬとね、なにになにかしないといけないとか、あるじゃないですか。決まりがあるじゃないですか。それをきれいにしなかったら、ちょっと怖い感じがあるんですね。その人が、まだ、夜になって、ちょっと皆にいろいろ怖がらせたりとか、人の体についてきたり、そういうのあるですね。(I11-14) (I11-15)そのときは、インドのブッダガヤがあるんですよ。ブッダガヤに行って、まだ大きなお祈りしないといけないですよ。そこで祈りしたら、そのときはそっちが落ちていて、もうきれるんですよ。(I11-15)

3) 輪廻のテーマ

事例3 インド人 男性 40代 コルカタ 日本語

(I3-6) (日本人は、火で燃やすと、魂は上の方に行くと思いますが、だいたい上の方に行くと思いますか、それとも輪廻というreincarnationですか) まあそういうふうに思ってますよ。reincarnationするからね。生まれ変わるとね。ですからインドではね、誰か亡くなったあとまた新しい子供が生まれるときはね、親戚はこの子どもは祖父さんの顔に似ているとか、性格がおじさんみたいとかね、言えることもあります。それが、お祖父さんの生まれ変わり、そういうような言い方もありますよ。実際はそういう風になっているかどうか分からないですけど。(I3-6)

(I3-7) (普通の人には、自分がもうすぐ死ぬと思ったら天国に行くとは思わずに、また誰かになると思って死にます?) そうですね。だけど、インドの場合はね、やっぱり亡くなった人はね、天国いくかどこ行くか分からないですけども、一応家族のみんなが思うのは、お願いするのは、魂が満足するために、この世の中で動いていることをお願いする。満足することをお願いしています。(魂が満足するとその魂はどうなりますか) いや、亡

くなった人がね、魂が満足するためにお願いする。分かりますか意味。(どこに行くようにお願いするのでなく) もちろん天国。満足することは天国へ行くこと、(はあはあ) そうお願いする。

(はあ、そうですか。インドの言葉で言うところ。) サルドー。サルドーは天国。(I3-7)

(中略)

(I3-23) (<ジャイナ教の>24人の聖人は、神さまでですか) 預言者ですよ。(神じゃない) 変わったもの。incarnation。化身です。(はあ、だから聖人に対して手を合わせるんですね)

(I3-24) ダライラマさん。ダライラマさんは人間ですよ。だから生まれ変わります。ダライラマさんが亡くなる前に、田舎の方でみた子どもが、生まれるんです。あの日で。その人が15代目のダライラマ。生まれかわります。観音様の生まれ変わりがダライラマ、化身。

(I3-25) (普通輪廻はいやだから解脱したい、断ち切って天国に行きたいと言いますが、聖人が輪廻するのがおもしろいですね) それはね、聖者たちが、やっぱりお寺とかそういうところで生活して亡くなったときは天国に上がる。(I3-25)

(I3-26) 輪廻転生には六つありますよ。天国、地獄、畜生・・・。もう一つ、天国よりも一つ上にならなってしまうんです。天国まで輪廻転生の中で入ってくると、生まれ変わることがあります。(天国も輪廻に入っているんですね)。だからそれよりも一つ上の方に入ってくると、生まれ変わらないんですよ。(I3-26)

事例5 インド人 男性 30代 ニューデリー 日本語

(I5-18) (死んだあとに別の人間として生まれ変わると考えることがあると思うんですが、それはどう思いますか) ヒンドゥー教の考えでは、別の人間、人間じゃないかもしれない、動物かもしれないよ、別の生き物という風に。840万種の生き物があるから。次の人生はどうなるか、それは分かりませんよ。でも一通り全部ならねば。全部一通り終わってから次は人間に変わります、という考え。

必ずしも人間になると限らないですよ。あなたのすることによって、次の人生という物があると。そういうような考え方。(I5-18)

(I5-23) だから、子どものころの話しかも知れないけど、そのときは、死んでから神の所にいて、じゃああなたは何をしたと。今までのこと全部神様の前で言う、それで言ったこと、いいこと

と判断するか、悪いと判断するか。いいことだったら、天国、悪いこと、たら地獄。裁判みたいに掛けられる。上で裁判かけられるよと言いますね。(I5-23)

(I5-24) (その、裁判に何日間かかると言われていますか) それは、すぐ。(すぐ。なんか日本では49日かかると言われますけど) 聞いたこと無い。死んでからすぐ。

(その神様というのは、特別の神様ですか?それとも一番強い神様ですか) 特別の<ききとれず>ヒンドゥー教の神様あるけど、それと違って、誰も見たことのない神様。イメージですね。(裁判をするのは普段お祈りしているシヴァ神とはちがう?) ちがう。誰も見たことのない、誰も形見ることがない。形に現れない。シヴァでもない、ウィシュヌでもない、ハヌマンでもない。(日本では、閻魔といいますが、それに近いですか) いや、分からない。えんまとか分からない。シヴァとか、いろいろいますけど、それは神様のメッセンジャーなんです。だから一番上にいる神様ね。さっき言ったように、誰も見たことがない。写真、出てきたりするの、それは神のメッセンジャーなんです。(つまり、一番、唯一の神ということですね) はい、唯一というか、まあ神様は一つだけ。(その現れがいくつかあると) そうそう、それがメッセンジャーなんですね。メッセンジャーというのは、そういう人たちが、いいことをしたでしょうから、メッセンジャーになった。昔は、神様、ドゥルガーとか人間だったんですよ。(I5-24)

(I5-26) (そのreincarnationをずっとしていくと思いますか。何回も何回も) はい。と思います。さっきの840万種、reincarnationないとその話にならないからね。(さっきの話もう一回、840万種類の生き物があって、それに順番になって行くわけですよ。一通り、全部なるわけですか) 何にもしてないと、そのままなっています、自然に(ああ、自然にして行くと、なっていく) それをとばしたいんだったら、何かするんだたら、いい事しないといけないですよ。(I5-26)

(I5-27) (あの、よく日本では6種類あると伝わってくるんですね。人間になるか、動物になるか、天国か、6つだけとは) 限らない。分からない。限らない。(6つと言われることはないですか) ないない。(I5-27)

(I5-28) (それで、次の時に天で生まれるということはあるわけですね) 天という・・・(今回死ん

だ人で、いいことをしていた人は、天に行くことがありますよね。天国では神のそばにいくんですかそれとも神と一体になりますか) 神とはならないけど、神のそばにいるというか。その範囲、神さまの範囲にいる。だから良いことをすると、人間にもなれるし。人間にもならなくてもいい。サイクルに入らなくても。サイクルに入ることを免除するため、よいことをしないといけないんですよ。毎回毎回、人間に生まれなくて良いために。というか、生まれてまた次のいろいろしなきゃいけない。そういう大変な苦労というかね。そういうサイクルに入らないですむため、いい事しないといけない。(I5-28)

(I5-29) (そのサイクルから抜け出す人というのは、天国にいるんですか) そう。

(それは100人に1人か2人ですか?) そうは限らない。(大体のイメージでは) 分かりません。それは生きるのことによって、神様が判断するんですね<笑い>。

(それで、人間にまた生まれるということは、楽しいことですか) 楽しいというより、他の動物よりいいでしょう。考えることも出来るから。(I5-29)

事例6 インド人 男性 40代 コルカタ 日本語

(I6-5) (輪廻するか) その人の活動で決まります。神様が決めるんです。天国行くか地獄に行くかは神様が決める。年一回思い出すとき、神に祈るは、亡くなった者が天国に行けるよう、自由に平和に動けるように。(I6-5)

(I6-6) (天国では神のそばに行くのか神と一体になるのか) その話は仏教の中にはいる。天国の意味、こちらのひとが言っているのは、平和にする。苦しいことはしないように。魂が苦しんでいるというのはしてほしくない。そう祈る。神と一緒にいるかは、ヒンドゥーの人は考えていない。平和、自由に動けると祈る。平和、自由に動けると祈る。(I6-6)

事例7 インド人 男性 40代 コルカタ ベンガル語

(I7-1) (死後どうなるか) 人間が亡くなったら、死体を火葬するが、魂は出てしまう。うごいている。世の中で。また人間として生まれてくる。どういう形で生まれるかわからない。一応生物には生まれてくる。(何日ぐらいか) それが、その人の世の中の仕事でこれがわからない。いいことを

やったらすぐ生まれてくる。悪いことをすると悪い。はっきりはいえない。はっきり言えません。(I7-1)

(I7-2) (天国、地獄はあるか) 天国、地獄の話は一応あるけど、今はだんだんなくなっている。人間が亡くなったら、いいことをやれば天国へ上がるとか、わるいことで地獄、いまは、我々が動いているのは、全部太陽の力で動いている。太陽の神様。だから、天国地獄は何も思わない。(I7-2)

事例8 インド人 8人とのディスカッションにて 女性E 20代 シャンティニケタン 英語
(I8-1) E:我々は、人間です。我々は、仕事をやっている。世界は一つの舞台です。我々はアクターです。ある日、我々はなくなります。その代わりに、もう一人がそういう仕事をしにくるんです。亡くなる前に仕事をする。天国、地獄、魂は信じない。(通訳氏が自分の意見を言う:アメリカの科学者で、こういう研究をした。人が亡くなる前に、ガラスの部屋に入れ、亡くなるときはガラスが割れ、たましいが出てしまった) E:それも信じない。信じていない。体の中に魂のあることを。人が亡くなったら、天国か地獄かは、信じていない。人は生まれ変わる?私はこの世の中で生きているが、我々は仕事を終わった後、無くなってしまう。私の代わりに他の人が生まれ変わり、同じ仕事をする。だから信じていない。

(死んだ魂は消えるということですか?) E:はい。消えるんです。(I8-1)

<別の男子学生A>消える <E:頷く>

(I8-2)<他の男子学生A> 生まれ変わることはちょっと信用があまりできない。人間が亡くなった後魂が天に行ったり地獄に行ったり、そこから戻ってくることはちょっと信じられない話です。

事例11 インド人 男性 40代 コルカタ 日本語

(I11-20) (そうですか。それでは、輪廻すると思いますか。人間の魂が。輪廻。reincarnation) りんね。例えば?どういう意味?(人間が亡くなったあとにまた人間になる) ある。それは可能性ある。(人以外になることはありますか) ん?(人間以外になることはありますか) 人間以外になること、あると思う。(I11-20)

(I11-21)だから、分からないけど、人が地獄、天国の、そういうところでしょ。で、それは、何というかな、いい事したら、天国にいける。悪い事したら地獄。地獄行く人は、人間に生まれ変われ

ないとか。たいへんな目にあったり、虫になったり。いろいろ生まれ変わってから、いくつかなってから人間に戻る可能性があるかと聞くんですが。それは本当かどうか、ちょっと自分でも、

(笑い) いえないですね。(I11-21)

(I11-22)地獄、天国の意味は、今ですよ。生きている間。(ふーん) いい事したら、みんなついてくる。いろんなことしてくれる。悪い事したら誰もついてこない。悪いこと言う。それが地獄。自分の考えです。(I11-22)

(I11-23) (はい。・・えー、そうですね、イメージの中で、死んでから何日ぐらいで生まれ変わるとかいうのはあるんですか) 早くても、そうですね、結構あるね。例えば、何というか、早くても1年後かな。あるときもっと早いとかいうけど。大体1年ぐらいかな、亡くなって生まれ。(I11-23)

(I11-24) (それで、天に行く人もあるわけですね。イメージの中で。それは、大体たくさんの人が天に行くと思ってるんですか、それとも少しの人ですか) そうですね、だからさっき話した通りなんですけど、地獄天国の意味で、天に行く人と地に行く人があるから、やっぱりたくさんでなくて、人によるじゃないかな。(人による?たくさんではない?) うーん、だからいい人だったらそうじゃないかなと思います。実際見たこと無いから。(I11-24)

(I11-25) (それで、天に行ってもまた人に戻ることはあると思いますか) 天国行っても人に生まれ変わる可能性は、あるんですね。(I11-25)

4) ヒーラーのテーマ

事例5 インド人 男性 30代 ニューデリー 日本語

(I5-34) (実際今どうなっているかとかですね、そういうことを分る人はいるんですか、死んだ魂が今どうなっているかを、特別に祈って分かる人は居るんですか) それは、人がどう信じるかによりますけど。私たちの考えは、誰も知らない。神様しか知らないから。こういう風に言うんだったら、それはうそです。坊さんとか、言うんだけど、それはうそです。分からないからホントは。(I5-34)

(I5-35) (やっぱりお坊さんが言うことがあるわけですね?) はい。(例えば、新しく生まれてきた赤ちゃんが生まれ変わりますねとか、言う人が居ますか) そういう風に聞きますけどね。(言う

人がいる) はい。昔はどどここの人だったと、そういう風に。昔は動物だったっていう風にはあまり聞いたこと無いけどね。＜笑い＞ (ほー) 昔は僕のうちはあっちの村なんだよとか、親の名はこうなんだよとか、そう言う人も居るんだけど、実際に会ったこと無い。私は。けれども、信じません。いろんな話は出てきますけどね。(I5-35)

(I5-36) (あー、私今回インドネシアでバリ島です、やはりそういう人がいました。ちゃんとお金を、おみやげを持ってゆくと、魂の声を聞いて、お祖父さんが赤ちゃんに生まれ変わりましたというような話をするそうですね) 信じることによって、我々もこくちく聞き取れず>されるとおもいます。(ん?) でもインドでは、それは無い。(ん?) インドでは、そういう、聞いたことがない。おみやげを持って行って、死んだ人が、今ね、別の形の、人間にうまれたよとは。聞いたこと無い。(I5-36)

(I5-37) (ただ、そういうことを言うお坊さんはいらっしゃると・・) 坊さんはいらっしゃるけど、たぶん教育によるんだけど、教育足りない人は、お坊さんの言ったことをひたすら信じてしまうという。ただ、そのかわり、お金をもらう。また、もうちょっとだまして。また。そのようなお坊さんいます。実際坊さんも生きて行くために、人をだましているんですよ。聞いてくれるからそういうことやる。聞いてくれないならやらないと思います。(I5-37)

事例11 インド人 男性 40代 コルカタ出身 日本語

(I11-26) (それから、死んだ人に対して、なにか報告することはありますか、生きている人が) 生きている人が? 死んだ人に? (死んだ人に、こう、今私はこういう事していますよとか) 考えないですね。持ってもないね。報告したいとか。別にそういうの全然考えてありません。(I11-26)

(I11-27) (じゃあ、インドにいる頃に、祖父さんとか、お祖母さんは、死んだ人に何かしゃべっているということはなかったですか) そうですね、そういうのあるけど。だから(ある)でんくまるくききとれず>といったんですけど、人間ちゃんとしてしなかったら、人間、体についてきたりとか、でその人の口から話すんですよ。亡くなった人が。口から(I11-27)

(I11-28) (その人の口から?) ええ。体に入ってからですね、口から全部しゃべるんですよ。ここ

でこういうことがあって、こうなって、ああなあって。全部しゃべって、それから、そういう専門がおるけど、そういう専門が聞いて、全部聞いてもらって、それから、やっぱり体から出るんですよ。(I11-28)

(I11-29) (専門の人とはなんと言うんですか) 向こうで? なんと・・一般的にロージャというんですよ。例えばマジックする人みたいなもんですよ。

(ロージャって、アルファベットでどう書きますか) ROJAA。(これはどういう意味があるんですか) その、そういう専門家に、例えばですけど、幽霊が憑いてきたときに、普通じゃないから、ちょっとおかしくなってくるんですよ。そうすると、家の人分かっているから、その人に、ロージャさんに、頼む。呼ぶ。それで夕方来て、いろいろ、そしてしゃべってから、その人を体から抜け出すんですよ。(I11-29)

(I11-30) (この人はバラモンですか、お坊さんですか) お坊さんじゃない。一般の人間で、ただその力を持っているんですよ。その言葉言うとか、そのあり方言うとか、知っているだから、その人じゃないと、できないですよ。田舎で、そういうひとが居って、夕方太陽が沈む頃に来るんですよ。そして、それからこういうふうにあるんですよ。でそれから、体から離れて、次の、どこかいなかったそのことを、ちゃんとして、お祈りして、それから落ち着くんですよ。もう二度と、こない。(I11-30)

(I11-31) (その一、離れたと。そのあと天にいったとか、別の人間になったとか分かるんですか、その人) それは、ちょっと分からないですね。そういう場合。ただ、ブッダガヤに、おおきなおいのりしたら、そこにどこかいるっていうんですよ(ん? ブッダガヤに行ってお祈りすると?) そこに何かそういう場所があるらしいんですよ、でそこにみんな集まるみたいな感じがあるんですよ。

(そこに集まる?) ブッダガヤに。お寺か何かあるらしいんです。(魂が集まるということですか?) はい。(I11-31)

III 考察

インドにおける死後の儀礼で、霊が家族のもとに戻るというファンタジーが存在することが確認でき、お供えも広汎に見られ、毎年のお盆(年に一度死者の霊が戻る行事)については存在することが分かった。しかし、インドでは、地域や階

層によって、死者を迎える習慣が異なることがはっきりした。チェンナイの事例1では、5月から6月に、1日だけ祖先の魂が来て、ほとんど家にいるとした。ムンバイの事例2では、9月2日から2週間がシュラッドというお盆で、食べ物をお供えとした。コルカタの事例3、6は、9月17日、ドルーガ祭りの1週間前に、モハラヤタルボンがあるとする。ニューデリーの事例5では、9月のはじめ（月の満ち欠けによって決まっている）の9日間、ナヴラトレがあるとする。川のほとりでやることが一番良いとする。同じコルカタの事例7では、Batsarik Sradhoを年1回するというが、命日にするとしている。ヒンドゥー教でありながら、お墓を持っており、毎日線香をあげている。これらの事例から、魂が戻るという考え方は、インドにも存在するが、戻らないという考えも多く、とくに事例11では、その考えに「日本に来て、ああこういうこともあるかなと思った時があります」と驚きを示している。そして、年1回儀式をするのは、カーストの高い人だとする。また、事例3の「天国にいった人は、戻ってこないけれど、その思い出が戻ってくるということ」というように、戻る霊の格を低く見る考えも存在した。

ところで、一般にインドでは火葬のち灰を川や海に流すという文化があり、イスラム教徒は土葬を行う文化をもつ。ところが、我々のインタビューで、ヒンドゥー教徒の中で、4人もの人が、骨（一人は遺体そのもの）を墓に入れるとした人がいた。これは偶然であろうか。表面に現れている以上の現象が示されているように思われた。

死者との対話のテーマでは、「死者への報告」は直接的にはいつでも言えるのに、お寺にお参りして、あるいは神のメッセンジャーに伝えることで、神に届くようにという考えかたがよく見られた。ある意味で、日本で仏壇の前で話しかけているような形は、インドでいつでも出来るとされた報告であるが、日本の方が、それが死者に伝わっているという暗黙の安心感が存在すると思われる。インド人は、死者のさらに上に、神のメッセンジャーを文化的に定置し、さらにその奥に名前のない唯一神をおくという、神が上で祖先が下というヒエラルキーを想定していることが多いと思われる。日本との違いは、インドにおける神の強さであろう。

輪廻のテーマにおいては、肯定する人が多かったが、いつ生まれ変わるかについては、事例5のように「すぐ」という人も、事例11のように「1

年後」という人もあった。また、良いことをすると早く生まれ変わるという事例5の発言も見られた。また、大学生とのディスカッション、インタビューでは、輪廻や宗教を否定する人が多く見られた。意識では否定しても、文化としては残っているということがしばしば見られた。

ヒーラーとしては、ロージャROJJAが存在し、除霊を行っていることが示された。

ここで、文化人類学者の記載したお盆について引用し、文献的に補強をしたい。金(2000)のp109によると、イスラム教に改宗したN村のムスリム・ポトゥアでは、死ぬと魂が体から抜け出し、他の世界に行くと言信するが、ヒンドゥー教徒のように輪廻・転生の考えを持っていないとする。死後土葬をし、4日目、20日目、40日目に儀式を行い、イスラム暦の8月のシャバーン月の14日に、祖先供養を行うとする。一方、ヒンドゥー教徒であるC村のヒンドゥー・ポトゥアでは、火葬をする。15日目には庭で大がかりな祖霊祭シュラッドsradhdhが行われ、喪が明ける。1年目にはボチャリシュラッドbachari sradhdhの先祖供養が行われる。これによって、死者は初めてリネージの男性の祖霊たちに加わることが出来ると信じられている。1年が過ぎると特定の祖霊祭はない。

金によると、ヒンドゥー、ムスリムを問わず、蛇の女神やコレラの女神を別の名で信仰し、願掛けmansikはヒンドゥーのみならずムスリムの間でも広く見られる。願い事が叶うことで知られるモスクには、宗教の違いを問わず大勢の人々が訪れる。

外川(2003)によると、黒分9日の儀礼のあと、主にバラモン司祭の家において、7世代にさかのぼる祖先への祭祀（トルボン）がおこなわれる。クシャトリヤなどの上層農でも行われる場合があるが、そのときには通常の葬送儀礼のあとに行われる祖先祭と同様に、家庭司祭（クロ・プロヒト）を招いた祭祀が必要となる。バラモン司祭は、モハロエの日には、檀家の成員を連れてガンジス川の沐浴場に出向き、祖先供養（トルボン・スラッド）を行う。一般には、このモハロエは、ドゥルガ女神祭祀の開始の日と理解されており、早朝からチョンディの朗読などがおこなわれる。p306-307

このように、それぞれのフィールド研究でも、筆者の行ったインタビューと同じような儀礼が記載され、それも階層によって異なるものの、祖先の霊が戻るという現象については、インドでも存

在することが確認された。お盆の現象が、必ずしも中国発祥ということではなく、各地に自然に存在したと考えることが可能であろう。日本におけるお盆も、必ずしも仏教や道教に伴って伝わったと考える必然性はなく、もともと類似の行為は存在したと考えるのが自然である。

今後は、一般の人々の中に、霊や神の信念がどれほどあるか、また死者との対話の行動がどれくらい存在し、輪廻、シャーマンなどがどのように組み込まれているか、比較に耐えうる尺度によって質問紙調査を行い、明らかにすることが重要と思われる。また、同様のインタビュー調査を、他の文化圏で継続すること、さらに質問紙調査を各国で行うことが、死生観、神霊観の全体像を把握するためにも、さらにはそれらの心理学的な解明をするためにも必要と思われる。

引用文献

- 金基淑 2000 アザーンとホラ貝ーインド・ベンガル地方の絵語り師の宗教と生活戦略 明石書店
- 徐華竜 1995 中国の鬼 青土社
- 末成道男 1998 ベトナムの祖先祭祀ー潮曲の社会生活 風響社
- 外川昌彦 2003 ヒンドゥー女神と村落社会 風響社
- 中村俊哉, 倉元直樹, 中島義実, 印刷中 死生観 国際比較のための尺度作成についてー日本における祖先対話, 輪廻, 日常的シャーマニズムー福岡教育大学紀要 53-4
- 西井凉子 2001 死をめぐる実践宗教ー南タイのムスリム・仏教徒関係へのパースペクティブ 世界思想社
- Furnham, F. Lay theories: Everyday Understandings of Problems in the Social Sciences. Pergamon, 1988 細江達郎監訳 しろうと理論 北大路書房 1992
- 箕浦康子 1999 フィールドワークの技法と実際 マイクロ・エスのグラフィー入門 ミネルヴァ書房
- Reasman, Paul. 1970 Freedom in Fulani Social Life: An Introspective Ethnography. University of Chicago Press.
- 安野早己 2000 西ネパールの憑依カルトーポビュラー・ヒンドゥーイズムにおける不幸と紛争 keiso shobo

謝辞

本研究を行うにあたってご協力をいただいたインフォーマントの方々に御礼申し上げます。また、通訳をしていただいたBimal Kumar Paulさん, Visva-bharati 大学の Dr. Padmaruchi Mukherjee先生, Dr. Purabi Gangopadhyay先生に心より感謝申し上げます。なお、本研究は日本学術振興会科学研究費(課題番号13571007)の補助を受けた。